

唐代作家新疑年録 (7)

—— 嚴武・高駢・裴度・包佶・李百藥・李頻・盧綸

植 木 久 行

(1) 嚴 武 (字季鷹きやうよう)

○玄宗開元十四年丙寅(七二六) 生——代宗永泰元年乙巳(七六五) 四月末没、享年四十歳。

[論 拠]

① 『旧唐書』卷十一、代宗紀、永泰元年四月の条に、「庚寅(二十九日)、劍南節度使・檢校吏部尚書嚴武卒」とある。

② 『旧唐書』卷一一七、嚴武伝に、「永泰元年四月、以疾終、時年四十」とある。

③ 『旧唐書』卷一九〇下、文苑伝下、杜甫伝に、「永泰元年夏、〔嚴〕武卒」とある。

④ 『新唐書』卷一二九、嚴挺之伝に付す嚴武伝に、「永泰初卒、……年四十、贈尚書左僕射」とある。永泰年間は二年弱(永泰二年十一月、大曆に改元)であり、「初め」とは「元年」を指す。

⑤ 『資治通鑑』卷二二三、永泰元年四月の条に、「辛卯(三十日)、劍南節度使嚴武薨」とある。

生年は、②と④の享年「四十」によって逆算。

〔備考〕

嚴武の死亡日に関して、『旧唐書』代宗紀①と『資治通鑑』⑤は、それぞれ四月の庚寅(二十九日)、同辛卯(三十日)と記し、一日の差がある。現在のところ、どちらが正しいのかは未詳。生没年自体については、聞一多「唐詩大系」や呉文治『中国文学史大事年表』(上)以下、異説はない。ただし、姜亮夫『歷代名人年里碑伝総表』だけは、没年のみを書いて生年を記さない。

〔参考〕

嚴武は成都尹・劍南節度使在任中、「軍城早秋」詩(広徳二年〔七六四〕の作、『唐詩選』所収)を作り、気概雄壮と評される。当時、その幕僚(節度参謀・檢校工部員外郎)であった杜甫の唱和詩も伝わっている。嚴武は、成都に流浪中の杜甫を厚く庇護した。清の黄生は、『杜工部詩説』の巻頭に収める「杜詩概説」のなかで、嚴武と十四歳年上の杜甫との濃やかな交情について、次のごとく述べている。

杜公(甫)は交游広しと雖も、能くその窮を振ひて、善くこれを遇せし者は、惟だ嚴季鷹一人のみ。故に公の知に感ずるの心も亦た、死生替はること勿し。

杜甫はまた、嚴武の文学に対して、「新詩 句句好し」(「奉贈嚴八閣老」詩)、²「詩は清らかにして 意を立つること新たなり」(「奉和嚴中丞〔武〕『西城晚眺』十韻」詩)などと高く評価する。永泰元年、嚴武の靈柩をのせた舟は、華州華陰県(都長安の東、今の陝西省)の故郷へと帰葬されるべく、長江を下った。杜甫は江辺の忠州(四川省東端の忠県)でその舟を見送り、「素幔 流水に随ひ、帰舟 旧京に帰る」と歌っている(「哭嚴僕射帰櫬」詩)。二人の交遊をめぐる有名な逸話——杜甫は嚴武に殺されそうになり、その母親の仲裁でようやく助かった——は、単なる荒唐無稽の「小説」と考えてよい。⁵

注

- (1) 「奉和嚴武軍城早秋」詩として『唐詩選』に収める。黒川洋一『杜甫の研究』（創文社、一九七七年）第四章二の注（三〇六頁）によれば、杜甫が嚴武に贈ったり、嚴武について歌った詩は三十一首、嚴武が杜甫に贈った詩は三首残るといふ。
- (2) 『杜詩詳註』卷五所収、至徳二載（七五七）の作。
- (3) 『杜詩詳註』卷十一所収、宝応元年（七六二）の作。
- (4) 『杜詩詳註』卷十四所収、永泰元年（七六五）の作。
- (5) 土岐善磨『杜甫門前記』（春秋社、一九六五年）「杜甫をめぐる残酷物語」、黒川洋一『杜甫の研究』第四章の二、「唐書」杜甫伝中の伝説について、陳文華『杜甫伝記唐宋資料考弁』（文史哲出版社、一九八七年）第三章の壹「与李白嚴武交情考弁」など参照。

(2) 高駉（字千里）

○穆宗長慶元年辛丑（八二一）生——僖宗光啓三年丁未（八八七）九月没、享年六十七歳。

〔論 拠〕

① 『旧唐書』卷十九下、僖宗紀、光啓三年の条に、「九月辛未朔（二日）、淮南節度使高駉為其牙將畢師鐸所殺」とある。

② 『旧唐書』卷一八二、高駉伝に、光啓三年九月のこととして、

俄而乱卒升階、曳（高）駉数之曰、「公上負天子恩、下陷揚州民、淮南塗炭、公之罪也」。駉未暇言、首已墮地矣。

とある。

③ 『旧唐書』卷一八二、畢師鐸伝に、「光啓三年」九月、師鐸殺高駉」とある。

④ 『新唐書』卷九、僖宗紀、光啓三年九月の条に、「秦彦殺高駢」とある。

⑤ 『旧五代史』卷一三四、楊行密伝に、「其年〔光啓三年〕九月、秦〔彦〕・畢〔師鐸〕害高駢於幽所、少長皆死、同坎瘞於道院北垣下」とある。

⑥ 『資治通鑑』卷二五七、光啓三年九月の条に、「甲戌〔四日〕、〔秦彦〕命其將劉匡時殺〔高〕駢、并其子弟甥姪無少長皆死、同坎瘞之」とある。

⑦ 『唐詩紀事』卷六三、高駢の条に、「生於長慶之首、卒于光啓之間」とある。

高駢の生年は、⑦の「長慶〔年間〕の首に生まる」によって、長慶元年に確定できる。聞一多「唐詩大系」が「八二一（長慶元年）生」とするのも、おそらくこの『唐詩紀事』⑦の記載にもとづくものであろう。他方、その没年は①⑥によって、光啓三年の九月になるが、死亡日は『旧唐書』僖宗紀①が一日（辛未朔）、『資治通鑑』⑥が四日（甲戌）とし、三日間の異同がある。『旧唐書』が「辛未朔」の下に「甲戌」の二文字を脱した可能性が高いが、現在のところ、両者の是非を確定できない。

享年は生年と没年によって計算すると、六十七歳となる。

〔備考〕

高駢の生没年は、聞一多「唐詩大系」や、周助初主編『唐詩大辞典』以下、異説はない。ただ、姜亮夫『歴代名人年里碑伝総表』や呉文治『中国文学史大事年表』(上)、『隋唐五代史』（中国大百科全書・中国歴史）の分冊）高駢の条（下）孝萱執筆）など、生年を未詳とするものがあるので注意を要する。ちなみに、『唐才子伝校箋』卷九、高駢の条（周祖謙・呉在慶執筆）にいう、

駢之死、『新五代史』卷一及卷六一均記於中和三年（八八三）、按此大誤。

と。しかし、この指摘は誤りである。前者（巻二）の場合は、高駢の死を明らかに光啓三年の条に記す。また後者（巻六二）の場合も、高駢が中和三年に没したと明言しているわけではない。この条は、「中和三年、唐即拜〔楊〕行密廬州刺史」の語で始まっており、中和三年とは単に楊行密の廬州刺史就任時を指すにすぎない。両者とも年月に關して行文がややあいまいであるものの、高駢の卒年自体に異説があるわけではない。

〔参考〕

高駢は、「山亭夏日」（七絶）で広く知られ、『三体詩』には「歩虚詞」一首を収める。『太平広記』巻二〇〇、高駢の条に引く唐末の謝蟠（隱）撰『雜說』には、高駢の文学を、次のごとく高く評価する。

唐高駢幼好為詩、雅有奇藻。屬情賦詠、橫絶常流。時秉筆者、多不及之。故李氏（唐朝）之季、駢其首焉。

撰者の謝蟠は、高駢の死後三、四年めにあたる昭宗の大順年間（八九〇―一）、『高駢詩』一卷の序文を執筆した謝蟠、を指すらしい（『唐才子伝』巻九、高駢の条参照）。隱の一字が脱したものであろう。『唐才子伝校箋』巻十、張鼎の条（周祖譔・賈晋華執筆）の臆説によれば、前掲の引用部分は、『高駢集（高駢詩）』に附された謝蟠隱の序文の一部であり、のちに『雜說』のなかにも再録されたものという。とすれば、高駢に対する極めて高い評価も、いちおう首肯できよう。

高駢は晩年、道教に溺れて身を滅すが、この点に關しては、宮川尚志『中国宗教史研究（第二）』に収める第十章「唐末の節度使高駢と方士呂用之」参照。また、淮南節度使在任中に關しては、周藤吉之「唐末淮南高駢の藩鎮体制と黄巢徒党との關係について―新羅末の崔致遠の著『桂苑筆耕集』を中心として―」が参考になる。

注

- (1) 『唐才子伝校箋』卷九、高駢の条も同じ。
 (2) 『資治通鑑』卷二五五、中和三年三月の条や、郁賢皓『唐刺史考』(第三冊)卷二二九参照。
 (3) 同朋舎、一九八三年。
 (4) 『東洋学報』第六八卷第三・四号所収、一九八七年。

(3) 裴 度 (字中立)

○代宗広徳二年甲辰(七六四)生——文宗開成四年己未(八三九)三月四日没、享年七十六歳。

〔没年の論拠〕

- ① 『旧唐書』卷十七下、文宗紀、開成四年三月の条に、「丙申〔十四日〕、司徒・中書令裴度卒」とある。
 ② 『旧唐書』卷一七〇、裴度伝に

〔開成〕三年冬、病甚、乞還東都〔洛陽〕養病。四年正月、詔許還京〔長安〕、拜中書令。以疾未任朝謝、詔曰……
 又遣国医就第〔都長安永樂坊の私邸〕診視。属上巳〔三月三日〕曲江〔池〕賜宴、群臣賦詩。度以疾不能赴、文宗遣中使
 賜度詩曰、「注想待元老、識君恨不早。我家柱石衰、憂来学丘〔孔子〕祷」。仍賜御札曰、「朕詩集中、欲得見卿唱和
 詩、故令示此。卿疾恙未痊、固無心力、但異日進來。春時俗說難於將撰。勉加調護、速就和平。千百胸懷、不具一
 二。藥物所須、無憚奏請之煩也」。御札及門、而度已薨³、四年三月四日也。上聞之、震悼久之、重令繕写、置之靈
 座。

とある。⁴

③ 『新唐書』 卷六三、宰相表、開成四年の条に、「三月丙戌〔四日〕、度薨」とある。

④ 『資治通鑑』 卷二四六、開成四年の条に、

春閏正月己亥〔十六日〕、裴度至京師、以疾帰第、不能入見。上勞問賜資、使者旁午〔往來の頻繁なさま〕。三月丙戌〔四日〕薨、諡曰文忠。

とある。

⑤ 『冊府元龜』 卷一四一、帝王部、念良臣の条に、

文宗開成四年、司徒・中書令裴度、以疾帰第。帝思其勲旧、勞問賜与、中使旁午、仍形於詠言。御札及門、度已薨歿。帝震悼久之、重令繕写、置於靈座。

とある。

これらの論拠によれば、裴度は開成四年の三月に没したことになるが、ただその死亡日に関しては異同がある。

『旧唐書』 本伝②、『新唐書』 宰相表③、『資治通鑑』④は、いずれも「三月丙戌〔四日〕」没とするが、『旧唐書』 文宗紀①のみは「三月丙申〔十四日〕」没とする。①丙戌と丙申は誤りやすいこと、しかも②同じ、『旧唐書』のなかの本伝②に明記される三月四日は、丙申ではなく丙戌であること。この二点を考えると、『旧唐書』 文宗紀の「丙申」は、論拠③や④のごとく「丙戌」の誤りと考えてよい。さらにこの丙戌〔四日〕没を補強しよう。論拠②と⑤は、病氣のために上巳節〔三月三日〕の祝宴に不参加の裴度に対する文宗の思いやりを述べて、「御札 門に及べば、度已に薨ず」〔②による。⑤もほぼ同じ〕という。この行文は文脈上、上巳節の翌日、すなわち三月四日こそふさわしく、十一日も後

上巳宴群臣曲江、度不赴、帝賜詩曰……。別詔曰……。使者及門而度薨。

とあり、『唐詩紀事』卷二、文宗の条にも同じ記事が見える。『旧唐書』文宗紀①の「丙申」は、単なる「丙戌〔四日〕」の誤記であろう。ちなみに、朱金城「白居易交遊考」（同『白居易研究』所収）のなかの「裴洎 裴度」の条に、裴度卒于開成四年三月丙申（十四日、此拠『旧紀』。『旧伝』謂卒于三月四日、『新表』同）。

という。これは没日の異同の検討を怠り、読者に無用の誤解を与えやすい。

〔備考〕

『新唐書』裴度伝には、

〔開成〕三年、以病丐還東都。真拜中書令、臥家未克謝、有詔先給俸料。

とあり、引き続き前掲の「上巳宴群臣曲江、度不赴、……」の語へと続く。これによれば、裴度の死は開成三年のごとく見えるが、これは明らかに行文中の誤りである。この点は、すでに南宋の洪邁『容齋隨筆』卷一、「裴晉公〔度〕禊事」の条に、ほぼ次のごとくいう。

白居易の「裴令公〔度〕の三月上巳の日、太原の竜泉に遊びて、去歲〔開成二年〕、洛〔水〕に禊そとせるを憶ふ」を示さるるの作に和し奉る」詩（『白居易集箋校』卷三四）は、開成三年（八三八）の「上巳節以後の」詩であり、裴度は開成四年三月になって始めて没した。「新史（『新唐書』本伝）に、以て〔開成〕三年と為すは誤りなり」。

と。洪邁の論証はやや粗雑であるが、その論旨自体はおおむね首肯できよう。

〔生年の論拠考〕

生年を逆算する論拠となる享年には、じつは一歳の異同がある。

(a) 『旧唐書』裴度伝に「年七十五」とする。

(b) 『新唐書』裴度伝に「年七十六」とする。

この両者のうち、どちらが正しいのであろうか。(b)には、裴度の死を開成三年とする行文上の誤りが見られるが、その享年「七十六」までも、ただちに「七十五」の誤りと速断することはできない。当然、別の論拠が必要となる。この意味で、羅聯添『劉夢得年譜』開成四年の条に見える指摘は、きわめて重要である。いま、羅説を敷衍しつつ述べると、次のごとくになる。

①大和四年(八三〇)に作られた劉禹錫の「為裴相公(度)讓官第一表」(瞿蛻園『劉禹錫集箋証』卷十五、卞孝萱校訂『劉禹錫集』卷十五)には、

臣犬馬之齒(自分の年齢の謙称)、六十有七、寿雖不長、亦不為短。

とある。大和四年当時、六十七歳であれば、開成四年(八三九)の没時には、『新唐書』本伝にいう「七十六」となり、『旧唐書』本伝の「七十五」は誤りである。

この羅説は、充分説得力をもつ。劉禹錫の代筆になるこの上表文が大和四年の作であることは、卞孝萱『劉禹錫年譜』、瞿蛻園『劉禹錫集箋証』卷十五、張達人『劉禹錫年譜』(台湾・商務印書館、人人文庫)、高志忠『劉禹錫詩文系年』(広西人民出版社、一九八八年)などにも等しく考証されており、確定できる。

さらに、この羅説を補強する注目すべき資料も存在する。②『太平広記』卷二五〇、裴度の条に引く唐の盧言撰『盧氏雜説』には、

唐裴晋公度在相位日、有人寄槐瘻一枚、欲削為枕。時郎中庾威、世称博物、召請別之。庾捧翫良久、白曰、「此槐瘻是雌樹生者。恐不堪用」。裴曰、「郎中甲子多少?」。庾曰、「某与令公同是甲辰生」。公笑曰、「郎中便是雌甲辰」。

とある。槐かひえ瘻はエンジュの木にできたこぶ。この条はまた、明の馮夢竜評纂『太平広記鈔』（中州書画社、中冊、一九八三年）巻三八、裴度の条にも、『盧氏雜說』として見えており、別に異同はない。ここで特に注目されるのは、庾威の逆算した生年は、まさしく広徳二年甲辰（七六四）となるが、『旧唐書』裴度伝の享年「七十五」の場合、生年は代宗の永泰元年乙巳（七六五）となつて異なる。『盧氏雜說』はいわゆる「小説」に属し、その資料的価値は通常の場合やや劣る。しかし、この場合は、必ずしもそうではない。というのは、『盧氏雜說』の撰者である盧言は、明らかに裴度と直接面識があつたと推定されるからである。その生年の干支は、かなり信憑性が高いと考えてよい。

要するに、裴度の享年および生年は、二つの論拠（劉禹錫「為裴相公諫官第一表」①と『盧氏雜說』②）にもとづいて、七十六歳没、逆算して広徳二年甲辰（七六四）の生まれ、と考えるべきであろう。

〔備考〕

白居易の「裴侍中晋公〔度〕、以『集賢（洛陽城内の坊名）林亭即事』二十六韻見贈、猥蒙徵和。才拙詞繁、輒広為五百言、以伸酬献」詩（『白居易集箋校』巻一九）には、

去年才七十 去年才かに七十

決赴懸車期 決して懸車（七十致仕）の期に赴けり

公志不可奪 公の志は奪ふべからず

君恩亦難違 君の恩も亦た違ひ難し

従容就中道 従容として中道に就き

俛僊来保釐 俛僊として来りて保釐す

の一節がある。裴度は昨年七十歳になるや、固く致仕を乞うたが、天子の恩命にもそむけず、やむなく中道をとって、東都留守の閑職に就くため洛陽にきたことを歌う。「保釐」の語は、『尚書』畢命篇の「康王は」畢公に命じて東郊（成周洛邑の民）を保釐せしむ」を踏まえ、東都留守になることを指す。

花房英樹「綜合作品表」（同『白氏文集の批判的研究』）や朱金城『白居易年譜』、同『白居易集箋校』卷二九などは、本詩を大和九年（八三五）に系年する。他方、羅聯添『白樂天年譜』は、「開成四年没、年七十六」の新説にもとづき、「去年才七十」の語から一年早い大和八年（八三四）の作とする。『白氏文集』自体の巻内の詩歌配列状況においては、大和八年の作と考えても少しも支障はない（花房「綜合作品表」参照）。裴度が東都留守になったのは、大和八年三月庚午（十九日）のことであり、『旧唐書』卷十七下、文宗紀、このあと開成二年（八三七）五月まで在任する。とすれば、前掲詩の引用部分は、大和七年、七十歳を迎えた裴度が、いわゆる七十致仕の礼にもとづいて致仕を願いでたが、天子の懇切な慰留にあい、一年間にわたる曲折を経て、やむなく折衷策として本年（大和八年）三月、東都留守の閑職に就いた、と考えれば充分意味が通じよう。『冊府元龜』卷三三一、宰相部、退讓二にも、「裴度鎮に在ること数年、齒懸車（七十歳）に及ぶ。累りに上表して致仕を求むるも、詔は皆な允さず。陳情益々懇ろなり。遂に東都留守に除せらる。司徒・侍中は故のごとし」という。他方、花房・朱の唱える大和九年作説の確実な論拠は見あたらない。おそらく裴度の誤った生没年にもとづいて推測したわけであろう。従って、清の何義門（名は焯）の「七十、東都留守と為る」（『白居易集箋校』所引）という説は誤りであり、裴度が煩悶・熟考のすえ就任したのは七十一歳のときであつた。

〔備考〕

『新唐書』裴度伝には、没年の誤りがあつたためであろう。従来、裴度の生没年は、『旧唐書』裴度伝に従つて、

「開成四年没、享年七十五歳」によつて計算され、代宗永泰元年乙巳（七六五）の生まれ、と考えられてきた。清の陸心源『三統疑年録』巻二、姜亮夫『歷代名人年里碑伝総表』、呉文治『中国文学史大事年表』(上)、『中国大百科全書・中国文学Ⅰ』、裴度の条（程千帆・周勛初執筆）、『隋唐五代史』(『大百科全書・中国歴史』の分冊、烏廷玉執筆)、周勛初主編『唐詩大辞典』(呉汝煜執筆)など、みな永泰元年生まれとし、これが長く「定説」となつてきた。¹⁵この意味で、羅聯添の新説はその誤りを訂正した重要な発言である。羅説はさらに、裴度と面識のあつた盧言撰『盧氏雜説』の傍証を得て確実さを増し、かくて「定説」よりも一年早く生まれたことが判明したのである。

〔参 考〕

裴度は周知のごとく、憲宗・穆宗・敬宗・文宗の四朝にわたつて、しばしば宰相や節度使などの要職についた著名な政治家である。元和十二年（八一七）には、淮西の藩鎮呉元済の乱を平定し、「元和中の中興」を実現した「杜稷之良臣、股肱之賢相」（『旧唐書』本伝）と評される。と同時にまた、裴度は文学者でもあり、張籍・劉禹錫・白居易などを庇護した、文学界の大御所的存在であつた。都長安の興化坊にある池亭（別邸）や、東都洛陽の集賢坊にある風雅な邸宅、および南郊の午橋にある別荘「緑野堂」¹⁷は、中唐期の華やかな文酒の宴の会場ともなつた。特に緑野堂は、有名な楽工、李龜年・彭年・鶴年の三兄弟が洛陽城内の通遠里に造つた豪壯な邸宅を移築したものである（『明皇雜録』巻下）。晩年の東都留守時代、裴度は集賢坊の自宅や緑野堂で、

事を見るの際に、詩人の白居易・劉禹錫と酣宴すること終日、高歌放言し、詩酒琴書を以て自ら楽しむ。当時の名士は、皆なこれに従ひて遊ぶ。

という（『旧唐書』本伝）。市原亨吉「東都留守時代の裴度の生活」¹⁸は、参照に値する好論文である（ただし、生年は旧説である。ちなみに、裴度の詩は、「語質直渾厚多し」（『蔡寬夫詩話』裴度詩）¹⁹と評される。

注

- (1) 当時、裴度は太原尹、北都留守、河東節度使として太原にいた。
- (2) 『冊府元龜』卷一一一、帝王部、宴享三、開成四年の条に、「三月乙酉(三日)上巳節、賜百寮宴於曲江亭、命內官以詩宣賜裴度」とある。また、南宋の王忠麟『玉海』卷二九、聖文・御製詩歌、「唐賜王起詩・詩笏 賜裴度詩」の条にも、ほぼ同じく記される。
- (3) 唐の李元(元)、『獨異志』(張永欽・侯志明点校本、中華書局、一九八三年)卷上、裴度賞花の条(二二頁)には、唐裴晋公度寢疾永樂里。暮春之月、忽遇遊南園、令家僕僮舁至藥欄、語曰、「我不見此花而死、可悲也」。悵然而返。明早、報牡丹一叢先發、公視之。三日乃薨。
- とある。「小説」ではあるが、裴度が永樂坊の自宅で没した傍証になろう。文中の「南園」とは、興化坊にある裴度の池亭を指す(徐松『唐兩京城坊考』卷四)。作者の李元・李元は、咸通六年(八六五)、明州刺史となった李伉の訛らしい(程毅中『唐代小説史話』三四一頁に引く李劍国の説)。
- (4) ほぼ同じ文が『冊府元龜』卷三一九、宰輔部、褒寵二に見えるが、「開成四年」を「大和四年」に誤る(明版)。「門」の字、明版は「聞」に誤る。いま、宋版(『宋本冊府元龜』第一冊)による。
- (5) 同『唐代詩文六家年譜』(学海出版社、一九八六年)所収。
- (6) 『全唐文』卷六〇一所収。
- (8) 下孝萱『劉禹錫年譜』大和四年の条にいう、「表」云、「伏以三公非曠職之地、宰相非臥理之官。伏枕之初、已有陳乞、請罷直食、兼辭貴階。伏蒙優詔、纔遂一事。頻降中使、慰勉再三。專令御医、旦夕珍視」云々。按『旧唐書』卷一七〇「裴度伝」云、「度年高多病、上疏懇辭機務、恩礼弥厚。文宗遣御医診視、日令中使撫問。(大和)四年六月詔曰」云々、兩者完全符合。此「表」当係四年六月前所作」と(一五六頁)。また、瞿蜕園『劉禹錫集箋証』卷十五(三八二頁)には、より綿密に考証している、「按、『旧唐書』度本伝、『度年高多病、上疏懇辭機務、恩礼弥厚。文宗遣御医診視、日令中使撫問』。此表中所謂『臨御之始、宰臣四人、逮今零落、忽已一半』、蓋指大和元年(八二七)之宰相王播・韋处厚・竇易直及度。处厚二年(八二八)十二月、播四年(八三〇)正月、先後以暴疾卒、易直則二年(八二八)十月出鎮山南東道。從知此表定為四年(八三〇)所上。答詔中(上表文の後に収める「批答」を指す)引用者注『河朔載寧』一語指平滄景李同捷之乱、是三年(八二九)四月事。『郊丘畢事』一語指三年十一月、親祀南郊、礼畢御丹鳳門大赦」と。さらに上表文中の「位添公台、近十五年」の語に

- 対して、「裴度以元和十年（八一五）入相、至大和四年（八三〇）、正十五年」と注する。
- (9) 王汝澍ら『太平広記選』上冊（齊魯書社、一九八〇年）に、「作者的意思似乎是撮拾史之遺文、以備採録」という。
- (10) 白居易のいわゆる「三月三日祓禊洛濱」詩（卷三三）の長い詩題によれば、開成二年（八三七）の上巳節に、東都留守裴度、河南尹李瑑の主宰する盛大な洛水での舟遊びに、白居易や劉禹錫らとともに参加した者のなかに、「駕部員外郎盧言」がいる。この人物が『盧氏雜説』の撰者と推定される。周勛初『唐語林校証』下の附録「唐語林援摭原書提要」のなかの『盧氏雜説』の条（七八三頁）参照。ちなみに、盧言の事跡については、この白詩に対する朱金城の注（『箋校』卷三三）や、周祖譚主編『中国文学家大辞典（唐五代卷）』盧言の条（陳尚君執筆）など参照。
- (11) 『中国文学家大辞典（唐五代卷）』盧言の条（陳尚君執筆）など参照。
- (12) 台湾・国立編訳館、一九八九年。
- (13) 王拾遺『白居易伝』（陝西人民出版社、一九八三年）も、大和八年の作と考えるらしい（二七五頁）。
- (14) 郁賢皓『唐刺史考』卷四八（第二冊）、東都の条参照。なお裴度は、長慶二年（八二二）の一時期、すでに東都留守になったことがある。
- (15) 拙稿「唐代作家新疑年録」(4)（弘前大学人文学部『文経論叢』二十六卷三号、一九九一年）の「顔真卿」の条参照。
- (16) 裴度はかつて高郢の致仕を許す詔を書いたとき、七十歳になっても致仕しない杜佑を諷刺したという。唐の李肇『唐国史補』卷中、「高郢致仕制」の条参照。
- (17) 『全唐文』卷五三七の小伝も、「薨年七十五」とする。
- (18) 拙著『唐詩の風土』九二頁以下参照。
- (19) 『東方学報』（京都）第三十六冊、一九六四年。
- (20) 郭紹虞校輯『宋詩話輯佚』卷下所収。

(4) 包 倍 (字幼正)

○玄宗開元十六年戊辰（七二八）ごろ生？——徳宗貞元八年壬申（七九二）没、享年六十五歳？

〔没年の論拠〕

① 友人の権徳輿撰「祭〔故〕秘書監文」(『全唐文』卷五〇八)には、

維貞元八年(七九二)、歲次壬申、五月朔日、故吏金部員外郎蕭存・太常博士権徳輿・大理寺丞王純等、謹以清酌庶羞之奠、敬祭於故秘書〔監〕包七丈〔侏〕之靈。

云々とある。これによれば、故の秘書監包侏は、貞元八年五月以前に没したことになる。祭文中の「朔日」は、おそらく「某某朔某某日」の略であろう。

他方、『唐会要』卷三五「経籍」の条と卷七七「論経義」の条には、それぞれほぼ同じ内容を次のごとくいう、

② 貞元七年十二月、秘書監包侏奏、「開元礼所与月令相涉者、請選通儒詳定」。従之(卷三五)。

③ 貞元七年十二月、秘書監包侏奏、「開元刪定礼記月令為時令、其音及義疏、並未刊正。其開元礼所与月令相涉者、請選通儒評定」。従之(卷七七)。

この②③によれば、包侏は貞元七年十二月までは確かに生存していたことになる。従って包侏の死は、貞元七年の十二月以降、貞元八年の五月以前となる。この没年期間をより縮小する資料として注目されるのは、包侏の死を悼む孟郊の「哭秘書包大監」詩(華忱之校訂『孟東野詩集』卷十)である。その冒頭には、

哲人臥病日 哲人(包侏を指す) 病に臥する日

賤子泣玉年 賤子(孟郊の自称) 玉に泣く年

とあり、華忱之「孟郊年譜」は本詩を貞元八年に系年し、後句を「正用楚下和獻玉的故事、以自比應試失意」と説明する。確かに後句には、進士科に落第した作者の悲哀が凝縮されていよう。とすれば、包侏の病死は、知貢奉陸贄のもとで韓愈・李觀・崔群・歐陽詹・王涯など錚錚たる俊傑が一挙に及第して「竜虎榜」と呼ばれた貞元八年春の放榜(合格発表)以後、と考えてよい。おそらく、晚春三月から夏の四―五月にいたる約三か月の間に病没したのである

う。『唐才子伝校箋』巻三、包佶の条（傅璇琮執筆）や蔣寅「詩人包佶行年考略」⁷が、貞元八年の「春夏間」没と推定するのは、この意味で妥当である。

〔備考〕

周勛初主編『唐詩大辞典』や周祖謨主編『中国文学家大辞典（唐五代卷）』⁸は、包佶の死を貞元八年の「五月」と明言する（いずれも賈晋華執筆）。この論拠は前掲の祭文の日づけ「五月朔日」であろう。朔日が「一日」ではなく「某某朔某日」を意味するとしても、祭文の作成は通常、死亡した当日ではなく、少くとも数日以降になることからすれば、この断言はやや軽率であろう。また呉文治『中国文学史大事年表』⁹が、貞元八年の条に「四月、包佶卒」と記すのも、やや武断の嫌いがある。

〔生年の論拠〕

大和二年（八二八）に作られた包陳（包佶の子）の門生、張賈撰「国子祭酒包府君（陳）墓誌銘并序」⁹（『千唐誌齋藏誌』下冊、一〇三三番）には、

考（亡父）諱佶、天宝中、以弱冠之年升進士甲科。

とある。包佶の進士科及第の年は、

- (a) 南宋の陳振孫『直齋書錄解題』巻十九、包佶集一卷の条に、「天宝六載（七四七）進士」とある。
- (b) 元の俞希魯『至順鎮江志』巻十八に、包佶を「天宝六年進士第」とある。
- (c) 『唐才子伝』巻三、包佶の条に、「天宝六年、楊護¹⁰榜進士」とある。

ことよって、天宝六載（七四七）であることがわかる。¹¹進士科に及第した天宝六載当時、包佶が文字どおり弱冠、すなわち「二十歳」（『礼記』曲礼篇上）であるとすれば、その生年は逆算して開元十六年（七二八）となる。しかし、こ

うした「弱冠」の語は文字どおり「二十歳」を指すと考えられる場合（『唐才子伝校箋』卷一、李嶠の条参照）も確かにあるが、他方では、二十代前半を中心とした広義の用例である場合もある。たとえば、「弱冠」で及第したとされる顔真卿の実際の年齢は、「二十六歳」であつた。（『登科記考』卷八、開元二十二年の条参照）。つまり、包佶の場合も、この墓誌の論拠のみでは、天宝六載当時、二十歳であつたと断定することは危険である。やはり疑問符をつけて今後の研究成果を待つべきであろう。

仮りに開元十六年生まれの場合、包佶の享年は六十五歳となる。生年が不確かである以上、この享年にも疑問符がつく。

〔備考〕

包陳の墓誌による生年の推定は、すでに蔣寅の「詩人包佶行年考略」のなかに見える。ただ蔣寅の論文は、天宝六載から二十を引くため、開元十五年（七二七）ごろの生まれとなり、前掲の筆者の生年（開元十六年ごろ）よりも一年早い。蔣寅の説は、じつは当時の年齢の数え方（虚歳）を無視した計算であり、従いがたい。ここでは、天宝六載当時、包佶が数え年二十歳であるとして十九を引く。ちなみに、周助初主編『唐詩大辞典』や周祖譔主編『中国文学家大辞典（唐五代卷）』も、蔣寅の説と同じく、生年を「七二七？」とする（いずれも賈晋華執筆）が、同じ理由で従いがたい。また、聞一多「唐詩大系」には、包佶の生年を「七二三（開元十一年）」と明言する。聞説に従えば、進士科に及第した天宝六載当時、二十五歳となり、広義の「弱冠」に含めることも可能ではあるが、その論拠が未詳の現在、にわかに従いがたい。

〔参考〕

包佶は、中唐前期の詩人・政治家である。父の包融は、中宗の神童年間（七〇五―七）賀知章や張若虚らとともに、

都長安で「文詞俊秀」をもって知られた（『旧唐書』卷一九〇中、文苑伝中、賀知章伝）。兄の包何も文学にすぐれ、玄宗の天宝年間以後、二人は「二包」と総称されたという（梁肅「秘書監包府君集序」。潤州延陵（今の江蘇省）の包氏父子は、唐代を代表する親子作家なのである。

包佶は、劉禹錫・戴叔倫・権徳輿・梁肅らと交遊し、詩人の孟郊は、その人がらと文学を「岳々たる冠蓋の彦、英々たる文学の雄」（「上包祭酒」詩）と評した。建中二年（七八二）の作とされる皎然の「贈包中丞（佶）書」（『全唐文』卷九一七）には、「今海内の詩人は、中丞（包佶）を以て竜門と為し、賢と不肖と、雷同して登らんことを願ふ」とあり、当時の社会的名声の大きさをうかがい知ることができる。

なお、前掲の蔣寅「詩人包佶行年考略」は、包佶の事跡を広く調査した基本文献である。ちなみに、『三体詩』には、「答竇拾遺（叔向）臥病見寄」と「秋日過徐氏園林」の二首を収めている。

注

- (1) 『文苑英華』卷九八三、四部叢刊『權載之文集』卷四八にも所収。
- (2) 七は包佶の排行。岑仲勉『唐人行第録』参照。
- (3) 拙稿「唐代作家新疑年録」(4)『文経論叢』第二十六卷第三号、一九九一年「梁肅」の条の〔備考〕(3)参照。
- (4) 人民文学出版社、一九八四年再版。
- (5) 華忱之校訂『孟東野詩集』（注(4)）所収。
- (6) 宋の洪興祖「韓子年譜」（徐敏霞校輯『韓愈年譜』（中華書局、一九九二年）など所収）参照。
- (7) 『唐代文学研究』第一輯（山西人民出版社、一九八八年）所収。
- (8) 中華書局、一九九二年。
- (9) 周紹良主編『唐代墓誌彙編』（上海古籍出版社、一九九二年）の「大和〇一一」（二二〇二頁）にも所収。
- (10) 南宋の趙彦衛『雲麓漫鈔』卷三に、「天宝六年楊護榜、試『鸚鵡賦』」とあり、明の徐応秋『玉芝堂談薈』卷二「歴代狀元」の条にも、「（天宝）六年、進士二十二人、状元楊護」とある。

- (11) 「登科記考」卷九も同じ。
(12) 華忱之校訂『孟東野詩集』卷六。
(13) 姚焱「皎然年譜」(『書目季刊』十三卷二期、一九七九年)や、賈晋華『皎然年譜』(廈門大学出版社、一九九二年)など参照。

(5) 李百葉 (字重規)

○北斉後主天統元年(『陳文帝天嘉六年』乙酉(五六五)生?——唐太宗貞觀二十二年戊申(六四八)没、享年八十四歳?)

〔論拠考〕

①『旧唐書』卷七二、李百葉伝に、「〔貞觀〕二十二年卒、年八十四、諡曰康」とある。

②『新唐書』卷一〇二、李百葉伝に、「卒、年八十四、諡曰康」とある。

生年は、享年「八十四」によって逆算。

これが、錢大昕『疑年録』卷一や、姜亮夫『歷代名人年里碑伝総表』以下の定説¹⁾である。

しかし、この説には若干、問題がある。『唐詩紀事』卷四、李百葉の条には、文宗・武宗ごろの人とされる胡璩撰『譚賓録』²⁾を引いて、享年を「年八十五」と記す。『太平広記』卷一七五、李百葉の条に引く『譚賓録』も同じである。この享年は、前掲の論拠①②の「八十四」よりも一歳多い。これにもとづいて逆算すると、生年は一年早い「五六四年(北斉武帝河清三年甲申)」となる。『唐才子伝校箋』卷一、李百葉の条(傅璇琮執筆)には、後者の享年「八十五」に対して、「未知何拠、恐不確、茲不取」とするが、じつは『冊府元龜』卷七八四、総録部、寿考の条にも、

205 李百葉、貞觀中、任宗正卿、卒。時年八十五。

とあって、『譚賓録』所載のそれと一致する。この享年は、中華書局影印『宋本冊府元龜』第三冊でも同じである。従つてこの「八十五歳」享年説は、「小説」（『譚賓録』）のほかに『冊府元龜』の裏づけを得たことになり、もはや無視しつづけることは許されない。現在、二説の是非が判別できない以上、定説とされる享年と生年の二つに疑問符をつけて、将来の確定を待つべきであろう。

〔参考〕

李百葉は、貞觀十年（六三六）に成る『北齊書』五十卷の撰者として広く知られるが、初唐期（太宗朝）の有名な詩人でもある。この点に関して、『旧唐書』本伝には、「藻思沈鬱にして、尤も五言詩に長ず。樵童・牧豎じゆと雖も、並皆みな吟諷す」と評されている。ちなみに、少々風変りな「百葉」の名は、幼年期病弱だったので、彼の祖母が元氣に育つようにとの願いをこめて改名させたものだという。

注

- (1) 『全唐文』卷一四二の作者小伝にも、「貞觀二十二年卒、年八十四」とある。ちなみに、『唐才子伝校箋』卷一、李百葉の条に、生年を「北齊高緯天流元年（五六五）」とするが、天流は天統の誤植である。
- (2) 『新唐書』卷五九、藝文志三、小説家類に、「胡璩『譚賓録』十卷」を著録し、「字子温、文・武時人」と注する。『郡齋讀書志』卷十三、小説類（孫猛校証本第七六一條）にも『譚賓録』十卷を著録し、「唐胡璩子温撰。皆唐朝史之所遺。文・武間人」という。

(6) 李 頻（字徳新）

○生年未詳——僖宗乾符三年丙申（八七六）没、享年未詳。

〔没年の論拠〕

① 『新唐書』卷二〇三、文芸伝下、李頻伝には、「李頻」表弓建州刺史。既至、以礼法治下、更布条教。時朝政乱、盜興、相椎奪、而建〔州〕頻〔李〕頻以安。卒官下²とある。建州は今の福建省建甌県付近。「盜興る」とは、乾符二年（八七五）に起こった、今の江蘇・浙江・福建の三省にまたがる浙西狼山鎮遏使王郢^{あつた}らの大規模な反乱を指す（『資治通鑑』卷二五二）。

② 建州の李頻のもとに身をよせていた曹松の「哭李頻員外」詩（『全唐詩』卷七一六、題下注に「時在建川〔州？〕とある」に、「出麾臨建水、下世在公堂」とある。後句は、李頻が建州の官舎で死んだことをいう。詩題の員外とは、建州刺史の前に在任した都官員外郎にちなむ呼称。

③ 張喬の「弔建州李員外」詩（『全唐詩』卷六三八）に、「已葬桐江月、空迴建水船」とある。論拠②の詩中にも見えた「建水」とは、建州の地を流れ、やがて閩江となって海にそそぐ川の名。「已に葬る 桐江の月」とは、李頻が死後、故郷の睦州（今の浙江省）に埋葬されたこと⁵をいう。桐江は、やがて浙江（錢塘江）となる川の名である。

④ 南宋の洪邁『容齋統筆』卷一、李建州の条には、唐末・五代〔楚〕の石文德撰『唐朝新纂』の一節「李頻」除建州牧、卒於郡⁷」を引く。

以上の論拠①②③④によれば、李頻は建州刺史在任中に没している。李頻の建州在任期間については、次の二つの資料が参考になる。

⑤ 『旧唐書』卷十九下、僖宗紀、乾符二年（八七五）春正月の条に、「以都官員外郎李頻為建州刺史」とある。

⑥ 同書同卷、乾符三年十一月の条に、「以度支分巡院使李仲章為建州刺史」とある。

この二つの資料を参照すれば、李頻の後任者が李仲章であり、李頻は就任の翌年、乾符三年（八七六）に没した、

と考えられる。その死亡月は不明であるが、おそらく「九、十月間」（『唐才子伝校箋』巻七、李頻の条（梁超然執筆）、「十一月、或稍前」（『唐才子伝校箋』巻十、曹松の条（周祖譚・賈晋華執筆））ごろであろう。

〔備考〕(1)

譚優学「李頻行年考」⁹ 乾符三年の条には、ただ「聞一多《唐詩大系》以李頻卒于本年。或信。姑從之」とのみいい、論証を欠いているが、趙昌平「鄭谷年譜」¹⁰ 乾符三年の条には、すでに前掲の論拠①⑤⑥によって、その死を乾符三年十一月の少し前とする。聞一多の「八七六」（乾符三年）没説も、同じ論拠にもとづくものであろう。ちなみに、小林大市郎「禪月大師の生涯と芸術」¹¹ 第六章「一、郷里の貫休と婺州刺史王慥、並に李頻に就いて」の条に、

その年〔乾符三年〕の秋に貫休が彼を訪れたとすれば、恐らく李頻は猶お一、二年生存していたのであろう。

と推測するのは誤り。また、『唐詩紀事』巻六〇、李頻の条に、

乾符中、以工部外郎為劍州刺史、卒。

とあるが、劍州は建州の誤り¹²。「工部外郎」も、『新唐書』文芸伝下、李頻伝や、論拠⑤によれば、尚書省刑部都官員外郎の誤りである（外郎は員外郎の略称）。

〔備考〕(2)

聞一多「唐詩大系」には、李頻の生年を「八一八（憲宗元和十三年戊戌）？」とする。その論拠は未詳であるが、譚優学「李頻行年考」は、聞一多の説に従い、その論拠を次のごとく説明する（大意）。

『新唐書』の李頻伝に、「小秀悟、逮長、廬西山、多所記覽。其属辞、於詩尤長。……給事中姚合名為詩、士多帰重、頻走千里丐其品、〔姚〕合加獎挹、以女妻之」という。また『旧唐書』巻十七下、文宗紀、開成四年の条には、「八月庚戌朔、以給事中姚合為陝虢觀察使」とあり、開成四年（八三九）八月以前、姚合は都長安で給事中の

職にあった。李頻が「千里を走りてその品（品評）を丐^こひ」、「長ずるに逮^{およ}び」、「姚合、女を以てこれに妻^{めあ}せ」しことからみれば、李頻の年齢は二十歳以後であろう。いま仮りに開成四年（八三九）、李頻は都長安にきて、まだ陝西觀察使に転出しないう給事中の姚合に謁見したと見なし、時間を二十二年溯らせるならば、「つまり、開成四年当時、李頻は二十二歳であったとするならば、その生年は」元和十三年（八一八）となる。聞一多『唐詩大系』が、李頻は本年に生まれたと仮りに定めたのは、きつと上述の論拠によるのであろう。これは、ほぼ『新唐書』本伝の内容と合う。別に「自分独自の」考えもないので、しばらく聞一多の説に従う。

この譚優学の説は、聞一多の「八一八？」生年説の論拠をいちおう推測したものとして評価できよう。しかし、その論述は一読してわかるごとく、確固とした証拠に乏しい。姚合は遅くとも開成三年には給事中¹⁴となっており（『冊府元龜』卷七〇七、令長部、黜責、朱儁の条参照）、従つて李頻が上京して「給事中」の姚合に謁見した時期が、開成四年であるとは限らない。しかも開成四年当時、李頻が二十二歳であったとする論拠は全くの臆測にすぎない。要するに、譚優学の説は、新たな生年の論拠を見いださぬままに、聞一多説への「信賴」を前提として生みだされたものである。現時点では、李頻の生年は「不可確考」（『唐才子伝校箋』卷七、李頻の条）としておくべきであろう。周勛初主編『唐詩大辞典』や周祖譔主編『中国文学大辞典（唐五代卷）』にも、「？一八七六」とある（ともに呉在慶執筆）。

〔参考〕

李頻は、中晩唐の著名な詩人姚合の女婿であり、同郷（睦州）の友人に、詩人の方干がいる。

注

- (1) 条教は、地方長官の下す、簡条書きにした教書・教令をいう。
 (2) 『唐才子伝』卷七、李頻の条には、「未幾卒官下」とする。官下は赴任地の意。
 (3) 『唐才子伝』卷十、曹松の条に、「初在建州依李頻」とある。論拠②の詩も参照。

- (4) この詩は、『文苑英華』卷三〇五(明版)や『全唐詩』卷七一七には、曹松の作とする。この点について、岑仲勉「讀全唐詩札記」(国立中央研究院『歷史語言研究所集刊』第九本、一九四七年)には、曹松に別の哭詩(論掬②の詩)があるところから、「殆んど松の詩に非ざるなり」という。しばらく岑説に従う。
- (5) ただし、譚優字「李頻行年考」、唐才子伝校箋 卷七、李頻の条(梁超然執筆)は、ともに李頻は故郷の睦州ではなく、建州に葬られた、と考証する。
- (6) 北宋の陶岳『五代史補』卷三、石文德獻挽歌の条には、「文德晚尤好著述、乃撰『大唐新纂』十三卷、多名人遺事。詞雖不工、事或可采。時以多聞許之」とある。
- (7) 建州の郡名は建安郡。
- (8) 『直齋書録解題』卷十九、李頻集一卷の条に、「唐建州刺史新定李頻德新撰」とある。鄭谷に「哭建州李員外頻」詩(『全唐詩』卷六七四)がある。
- (9) 『唐詩人行年考(統編)』巴蜀書社、一九八七年所収。
- (10) 『唐代文学論叢』総第九輯、一九八七年所収。嚴寿激・黄明・趙昌平『鄭谷詩集箋注』(上海古籍出版社、一九九一年)に附す趙昌平「鄭谷伝箋」(五一〇頁)にも見える。
- (11) 『小林太市郎著作集』第三卷、淡交社、一九七四年。ちなみに、貫休には「聞李頻員外卒」詩がある(同書一七三頁参照)。
- (12) 譚優字「李頻行年考」には「劍乃建字之音同形誤」という。ちなみに、同論考には、建州着任後の李頻の詩として「之任建安、淶溪亭偶作二首」(『全唐詩』卷五八九)をあげる。建安は建州の郡名。
- (13) 獎挹は推奨の意。
- (14) 鄭健行「姚合考」(同『中国詩歌論稿』新亜研究所、一九八四年所収)は、給事中就任を開成元年と推定し、徐玉美「姚合及其詩研究」(『国立台湾師範大学国文研究所集刊』三二号、一九八七年)は、開成二年と推測する。

(7) 盧綸(字允言)

○玄宗天宝七載戊子(七四八)生?——德宗貞元十五年己卯(七九九)没、享年五十二歳?

〔生年考〕

いわゆる大曆十才子の一人、盧綸の生年には、從來、四説ある。

① 天宝七載（七四八）生……聞一多「唐詩大系」、唐才子伝校箋、卷四、盧綸の条（傅璇琮執筆。趙昌平の書信によつて旧説②を改めた「新説」）、劉初棠「盧綸簡譜」（同「盧綸詩集校注」）（以下、「校注」とも略称）所収）など。

② 開元二十五年（七三七）か、その少し前生……傅璇琮「盧綸考」（同「唐代詩人叢考」）所収、傅の旧説）。

③ 開元二十六年（七三八）生……王達津「盧綸生平系詩」（同「唐詩叢考」）所収）。

④ 開元二十七年（七三九）生……べんこうげん下孝萱・きやうちようふ喬長阜「盧綸」（呂慧鵬ほか編「中国歴代著名文学家評伝（続編一）」）所収）。

この四説は、生年の近似から、大きく①（天宝年間生）と約十年早い②③④（開元年間生）に二分類することも可能である。ここでは、まず天宝七載（七四八）生年説①の論拠の検討から入りたい。

盧綸の「綸与吉侍郎中孚・司空郎中曙・苗員外発・崔補闕峒・耿拾遺漳・李校書端・風塵追遊、向三十載。数公皆

負当时盛称、栄耀未幾、俱沈下泉。暢博士当感懐前蹤、有五十韻見寄、輒有所酬、以申悲旧、兼寄夏侯侍御審・侯倉

曹釗」詩（旧唐書、卷二六三、盧簡辞伝に従つて、以下「懐旧詩五十韻」）と略称、「校注」卷二の冒頭には、盧綸自ら幼少期に

おける戦災避難の体験を、次のごとく歌う、

稟命孤且賤 少為病所嬰

八歳始読書 四方遂有兵

童心幸不羈 此去負平生

是月胡入洛 明年天隕星

夜行發瀟陵 悄恍靡所征

雲海一翻騰 魚竜俱不寧

因浮襄江流 遠寄鄱陽城

幼くして父親を失い、しかも病弱であった。八歳のとき、ようやく読書しはじめると、天下に兵乱が起り、中原地区が大混乱に陥った。一家は都長安を発ち、南下して鄱陽（唐代の饒州、今の江西省鄱陽県）の地に仮寓した、という。詩中の「是の月 胡 洛に入る」とは、天宝十四載（七五五）の冬十二月、安祿山の軍が東都洛陽を陥落させたことを指す（新旧『唐書』玄宗紀等参照）。天宝十四載当時、八歳であるとすれば、その生年は逆算して天宝七載（七四八）となる。

この論拠は、盧綸自ら幼少期の強烈な体験を追憶した発言であり、充分信頼できる。聞一多「唐詩大系」の「七四八」年生年説も、おそらくこの論拠にもとづく推定であろう（傅璇琮「盧綸考」など参照）。

頗る明解なこの生年説に対して、異論を唱えて学界に大きな影響を与えたのが、傅璇琮の「盧綸考」である。天宝七載生年説は、盧綸に関する他の資料と矛盾するとして、十歳あまりもくりあげた開元二十五年（七三七）か、その少し前に生まれたのだとする。その論拠は、次の三つである（大意）。

- ① 中晩唐期の姚合編『極玄集』巻上、盧綸の条に、「天宝末、挙進士、不第」とあり、『旧唐書』巻一六三、盧簡辞伝にも、「父綸、天宝末、挙進士、遇乱不第、奉親避地於鄱陽」とある。天宝七載生年説では、「天宝の末」、まだ八―九歳の子どもであり、進士科の受験は全くありえない。

- ② 盧綸の有名な「晩次鄂州」詩（『校注』巻四）には、

雲開遠見漢陽城 猶是孤帆一日程

估客昼眠知浪靜 舟人夜語覺潮生

三湘衰鬢逢秋色 万里帰心对月明

旧業已随征戰尽 更堪江上鼓鼙聲

と歌われ、「至徳中作」という題下注がある。至徳は肅宗の年号（七五六～八）である。安祿山の軍は天宝十四載十二月、洛陽を陥れた後、十五載六月、潼関を破り、玄宗は四川に出走して、安・史の叛軍が都長安を占拠した。同年七月、肅宗が靈武で即位して、至徳と改元した。至徳年間は、あわせて三年である。天宝七載生年説では、当時十歳ごろであり、この詩を作りえない。さらに盧綸には、「至徳中、途中書事、却寄李儋」詩（『校注』巻五）や「至徳中、贈内兄劉賛」詩（『校注』巻五）もあり、「乱離無処不傷情、況復看碑对古城」「時難訪親戚、相見喜還悲」などと、いずれも戦乱を描写する。詩題の「至徳中」の語は、「晩次鄂州」詩の題下注「至徳中作」が盧綸の自注であることを証明するとともに、「極玄集」や『旧唐書』盧簡辞伝の「天宝の末、進士に挙げらる」の記載が事実であることを証明できる。すなわち天宝年間の末、盧綸はすでに成人していたはずである。「三湘 衰鬢 秋色に逢ふ」（『晩次鄂州』詩）云々の語は、誇張を免れがたいけれども、当時、盧綸は決して十歳ごろの子どもではない。

◎ 盧綸は、司空曙や耿漳らとともに大暦十才子と呼ばれている。盧綸は大暦年間の初め、すでに諸人と唱和し詩壇でもかなり活躍しており、決して若い新参者ではない。天宝七載生年説では、大暦の初め、まだ二十歳になっていない（大暦元年、十九歳）。たとえ大暦年間の中期でも、二十余歳にすぎない。これは当時の詩壇の実情と符合しない。

傅璇琮「盧綸考」は、このように詳細に論証した後、次のごとく結論する。

『極玄集』や『旧唐書』にいう「天宝の末、進士に挙げらる」の記載は事実であり、当時、盧綸はすでに成人し、少くとも二十歳か、それ以上である。天宝年間の末（天宝十五載（七五六））、二十歳であるとして逆算すれば、その

生年は七三七年（開元二十五年）か、その前であるはずだ。盧綸の「懷旧詩五十韻」中の「八歳始讀書、四方遂有兵」とある下句は、じつは専ら安史の乱を指すというのではなく、玄宗が天宝年間の前期に起こした領土拡張戦争を指している。そして「是の月 胡 洛に入り、明年 天星を隕す」の句に至って、専ら安史の乱を指すが、これは別に「八歳 始めて讀書す」とは直接結びつかない。聞一多「唐詩大系」は、盧綸の他の詩の系年を考慮せず、さらにこの数句をつらねて理解したために、天宝七載（七四八）生まれとする誤った結論を得たのだ。

と。この傳説はかなり説得力をもち、以後大きな影響を与え続けたが、問題がないわけではない。この開元二十五年以前生年説の關鍵ともいうべき「天宝末、挙進士」の「事実」は、すでに『新唐書』卷二〇三、文芸伝下（盧綸伝）に、「（盧綸）避天宝乱、客鄜陽。大曆初、数挙進士、不入第」とあって、大きく変更されている。そもそも天宝の末（七五六）に受験資格を有した者が、大曆の初め（元年は七六六）に至る十年間ものあいだ江南の地に避難しつづけ、全く受験しなかったとは考えがたい。安史の乱中であっても、玄宗と肅宗があいついで没した宝応元年（七六二）の春を除けば、貢奉は毎年行われていたからである（『登科記考』卷十）。同じく大曆十才子の一人、耿漳は、宝応二年に及第している。『新唐書』盧綸伝は、『旧唐書』の説を明らかに否定していると考えてよい。当時まだ九歳あまりであった盧綸は、避難先の鄜陽の地で約十年間、進士科受験のために勉強しつづけ、永泰元年（七六五）か翌大曆元年ごろに上京して受験した、と考えられる。盧綸の「懷旧詩五十韻」には、この間のことを、

鄜陽富学徒 誚我戀無宮

諭以詩礼義 勛随賓薦名

と歌う。賓薦とは、いわゆる郷貢（賓貢）をいう。

また、傅璇琮の論拠②も、かなり主観的な捉えかたであり、確証にはなりにくい。というのは、同じ大曆十才子の

一人、親友の李端も、グループ内では年若い後輩詩人と目され、天宝年間に生まれたらしい。昇平公主（代宗の娘）の婿、郭曖（郭子儀の第六子）の私邸における盛大な宴集の席上くり広げられた十才子の集団的な文詠唱和¹¹⁾活動は、大暦元、二、三年ごろのことと推測されている。¹²⁾これは李端の進士科及第（大暦五年）以前であり、李端自身、当時のことを回顧して、

十五事文翰 大兕輕孔融

長裾遊邸第 笑傲王侯中

と歌っている（長安感事、呈盧綸詩〔全唐詩〕卷二八六）の冒頭。盧綸も当時十九―二十一歳ごろであっても、さしつかえないのである。

結局、残る論拠は、盧綸「晚次鄂州」詩の題下注「至德中作」や、「至德中、途中書事、却寄李儋」「至德中、贈内兄劉賛」詩に見える「至德中」の語である。¹³⁾このうち、「晚次鄂州」詩の題下注は、すでに『文苑英華』卷二九三（宋版）や『王荊公唐百家詩選』¹⁴⁾卷八（南宋初期刻本）に見えるが、いわゆる唐人選唐詩集の一つ、五代・韋穀編『才調集』卷二や明銅活字本『盧綸集』卷五（唐五十家詩集）所収）には見えない。従ってこの題下注は盧綸の自注ではなく、後人の注である可能性も否定できない。しかも傳説に従って開元二十五年（七三七）以前に生まれたと考えても、至徳年間の終り、盧綸は二十二歳にすぎず、「三湘衰鬢逢秋色」の語は、やはりふさわしくない。¹⁵⁾潘岳の「二毛」の典故を持ち出すまでもなく、三十代以上の年輩者の歌詠であろう。¹⁶⁾もっとも「衰鬢」の語は『文苑英華』卷二九三（宋版）などには「愁鬢」に作るが……。かくて、「至德中」と題された盧綸の二詩のみが、傳説の最終的な拠りどころとなる。天宝七載生年説にたつ劉初棠「盧綸簡譜」至徳元載の条などによれば、これらの「至德中」の三字は、後人が伝抄の際に誤って加えたものとする。『旧唐書』盧簡辭伝の「天宝末、拳進士、遇乱不第」によれば、詩中の

「時難」や「乱離」の語は、まず安史の乱を想起させ、「至徳中」の注記を生む理由となりえよう。さらに「至徳中、
途次中書事、却寄李儋」詩（七律）の後半には、

顔衰重喜帰郷国 身賤多慚問姓名

今日主人還共醉 応憐世故一儒生

と歌われている。すでに元の郝天挺が『唐詩鼓吹（註解）』巻五で、「衰老の年、郷国に帰るを喜ぶと雖も、貧賤の質は、猶ほその姓名を問はるるを慚づるを云ふ」云々と注することく、二十代前半（傳説の至徳年間の年齢）の作とは考えにくい。「至徳中」の語は確かに疑わしいのである。筆者は大暦十二年、盧綸が元載や王縉の事件に連坐して後の長い不遇期間に作られたと推測する（天宝七載生年説でも作者三十歳以上となる）。とすれば、「至徳中」の誤加は、宋代にまで溯ることになる。

このように考えてくると、開元二十五年以前生年説の論拠は、かなり揺れ動くことになる。これに対して、天宝七載生年説には、盧綸の「懷旧詩五十韻」のほかに、新たな論拠がつけ加けられ、一層その信憑性を増したのである。傅璇琮は『唐才子伝校箋』巻四、盧綸の条で、すでに紹介した「盧綸考」の旧説②を捨てて、趙昌平の書信による指教を受けて、天宝七載生年説を傍証する新たな論拠をあげ、次のごとくいう（大意）。

盧綸には、「臥病、寓居竜興観、枉馮十七著作書、知罷撰洛陽、赴緱氏。因題十四韻、寄馮生、並贈喬尊師」詩（『校注』巻三）がある。「馮十七著作」とは、「かつて著作郎となった馮著を指す。その詩中には、「潘岳衰將至、劉楨病未瘳」の句があり、「上句は明らかに潘岳「秋興賦」序（『文選』巻十三）の「余春秋三十有二、始見二毛」の語を踏まえており、当時、盧綸の年齢が三十二歳に近いことがわかる。また、韋応物には、「張彭州、前与緱氏馮少府、各惠寄一篇。

多故未答、張已云没。因追哀叙事、兼遠簡馮生」詩（韋蘇州集 卷六）がある。この「緱氏の馮少府（鼎尉）」も馮著である（岑仲勉『唐人行第録』を参照）。韋応物の詩は、冒頭に張との交遊を述べ、後に「余時忝南省、接讎愧空虚。一別守茲郡、蹉跎歲再除」という。韋応物は建中二、三年（七八一―二）、尚書比部員外郎に任ぜられたが、これがほかならぬ「南省（尚書省）を忝うす」である。建中四年（七八三）には滄州刺史に転出し、「歳再び除る」とあれば、興元元年（七八四）になるはずである。韋詩の終りに、「髮鬢已云白、交友日彫疏。馮生遠同恨、憔悴在田廬」という。（この句を）詩題とあわせて考えてみると、当時、馮著はすでに緱氏（鼎）の少府の任を罷めて閑居していたはずだ。従つて盧綸が馮著の「洛陽を撰するを罷めて、緱氏に赴く」のを見送る時期は、興元元年より早いはずだ。さらに大曆の初め（四年）、広州録事参軍となつて（南下する）馮著を見送る韋応物の詩（送馮著受李広州（勉）署為録事）、および盧綸の「秋夜寄馮著作」詩（校注 卷三）の「何言十載友、同迹不同群」を参照すれば、（大曆の初め、馮著と盧綸は都長安で知りあい、その約十年後にあたる大曆年間の末（大曆の最後は十四年（七七九）、盧綸の「秋夜寄馮著作」詩が作られたらしい。詩題の「馮著作」の語は、「臥病、寓居竜興観」詩（前掲）の詩題にも「馮十七著作」として見え、さらに「秋夜寄馮著作」詩の「蒼鬢欲如君」の語は、「臥病、寓居竜興観、…」詩中の「潘岳衰將至」ときわめて類似しており、二詩はほぼ同一時期に作られたらしいと推察されるので、——この条、『校箋』の解説は不十分でわかりにくいので、『盧綸詩集校注』卷三を参照して補つた（引用者注）、馮著が緱氏の尉に赴任するのは、大曆と建中の間（大曆十四年の次が建中元年）であるはずだ（馮著は興元元年（七八四）にはすでに緱氏の尉をやめており、その鼎尉在任期間（二―三年）を考えれば、この推測も充分成りたつ（引用者注）。当時（七七九―八〇ころ）、盧綸は三十二歳に近いとすれば、まさしく「懐旧詩五十韻」中の「八歳始読書、四方遂有兵」と合致する。八歳は（安史の乱の起こった）天宝十四載（七五五）を指し、その三十二歳はまさしく大曆十四年（七七九）であり、大曆の末にあたる。「懐旧詩五十韻」中の「四方遂有兵」の後に、引き続き「童心幸不羈、

此去負平生」と歌うのも、当時、盧綸がまだ子どもであったことをいう。さらに同じ詩の「遠寄鄱陽城」に続く「鄱陽富学徒、誚我戀無營」の句も、学童らしい態度である。これによって解釈すれば、諸詩においてみなよく通じる。「極玄集」や『旧唐書』盧簡辞伝に「天宝の末、進士に挙げらる」云々という「天宝の末」は、『新唐書』盧綸伝のごとく「大曆の初め」の誤りと考えるべきであろう。

傅璇琮は、天宝七載生年説に立てば、「於諸詩皆能通」と述べるが、ややおおまかな発言である。というのは、盧綸詩の「至徳中」云々と題された二詩の問題に関しては、全く言及していない。また、この傍証の論述にはやや説明不足がめだち、不明瞭なところもあるが、筆者のごとく補足して考えると、天宝七載生年説を裏づける新たな論拠として注目するに値する。

ところで、開元二十六年（七三八）生年説③を唱える王達津「盧綸生平系詩」は、盧綸の「懷旧詩五十韻」の冒頭（前掲）をとりあげ、次のごとくいう。

「是月胡入洛」とは、天宝十四載（七五五）に起こった安史の乱を指す。安祿山が洛陽に入った月、盧綸は「童」と自称し、避難しはじめた。昔の人が「童」というとき、いつも（前漢の）終軍十八歳を「終童」と呼ぶのを通例とする。とすれば、盧綸はこのとき、ほぼ十八歳であり、逆算すればほぼ開元二十六年生まれとなり、天宝四載（七四五）のとき、八歳である。天宝四載には、契丹や奚の酋長がそれぞれ公主を殺し、部落を率いて反乱した。

隨右節度使皇甫惟明は吐蕃と石堡城で戦い、官軍は不利であった。これはまさに「八歳始読書、四方遂有兵」の句と符合する。思うに、この「四方遂有兵」と「是月胡入洛」とは別のことである。聞一多「唐詩大系」は誤って同一のことであると考へ、盧綸を天宝七載（七四八）生まれとしたのは不確かである。

この論拠は、じつは「古人称童、常以終軍十八歲称終童為例」（王達津の語）とする前提から推測されたものであるが、童は一般に八歳以上、十九歳未満の未成年を指す言葉（『漢語大字典』四（二七一頁））であり、王達津の前提自体、かなり無理があつて従いがたい。確かに『後漢書』卷四四、胡広伝には「終（軍）・賈（誼）揚声、亦在弱冠」とあり、唐の李賢らの注に「『前（漢）書』、終軍年十八、為博士弟子、自請願以長纓必羈南越王而致之闕下。上奇其対、擢為諫大夫、往説越。越聽命、天子大悦。賈誼年十八、以誦詩属文称於郡中、文帝召為博士」という。しかし、『漢書』卷六四下、終軍伝には、終童の名の由来を「軍死時年二十余、故世謂之終童」と説明する。つまり、終童は二十余歳の若さで死んだ才士に対する哀悼の念をこめた呼称であり、十八歳を童と呼ぶ論拠にはなりえない。しかも盧綸の詩中には終軍を想起させる言葉が全くなく、単に「童」と自称するのみである。そもそも盧綸詩の冒頭部分は、幼少期の生活を一変させ、江南の地に約十年間も寓居することになった直接の原因である安史の大乱を回顧したものである。安史の乱が自己の生涯を追憶するとき、一つの重大なポイントとなるのは、単に盧綸だけのことではない。たとえば、李益の「従軍詩并序」には、「君虞（李益の字）長始八歳、燕戎乱華」とあり、韋応物の「京師叛乱、寄諸弟」詩にも、「弱冠遭世難、二紀猶未平」という。盧綸詩の場合も、広大な唐朝の辺境における、子どもにとっては全く縁遠い戦争ではなく、作者の住む中原の地を大混乱に陥れた身近な安史の乱であつてこそ、大きな意味をもつのである。王達津の説は、ほとんど説得力をもたない。

また、開元二十七年（七三九）生年説④を唱える下孝萱・喬長阜「盧綸」の論拠は、次のごとくである。

大曆五年に成る盧綸の「落第後、帰山下旧居、留別劉起居昆季」詩（『校注』卷二）に、「潘岳方称老、嵇康本厭喧」とある。上句は潘岳の「秋興賦」序（前掲）を踏まえている。大曆五年、盧綸が「方に」三十二歳であるとし

て逆算すれば、開元二十七年に生まれたはずである。

范之麟・呉庚舜主編『全唐詩典故辞典』下「潘鬢」の条にも、この詩句を引き、「这里用潘岳事、自述年方三十有餘」と説明しており（三三四頁）、この解釈自体は別に問題はない。しかも盧綸は大曆六年（七七二）の春、進士に及第できぬまま、元載の推挙によつて閩郷（閩）の尉となつてゐる（『盧綸簡譜』参照）。従つて本詩を大曆五年の作とする点も穩当であらう。

しかし、この論拠には、にわかに従いがたい。というのは、すでに述べたごとく、盧綸には同じ潘岳の典故を用いて大曆の末に作られた「臥病、寓居竜興觀、……」詩（前引、「潘岳袁將至」の句あり）があり、この場合は盧綸の「懷旧詩五十韻」に拠る天宝七載生年説に合致していた。いいかえれば、盧綸は同じ潘岳「二毛」の典故を、作成年代が約十年も異なる二詩のなかに用いたことになる。つまり、一方の詩中の典故は、かなりおおまかな、ただ空しく老いゆくことを誇張する措辞にすぎないことになる。この意味で、盧綸の「落第後、帰終南別業」詩（巻五）は注目にする。作成年代は、下・番の生年説の拠る「落第後、帰山下旧居、……」詩とほぼ同じであらう。この二詩には、類似の語彙・発想が見られる。前者（「落第後、帰終南別業」）に「落羽、羞言命、逢人強破顔」と歌えば、後者は「誰堪將落羽、迴首仰飛翻」と歌う。前者の「交疏貧病裏、身老是非間」に類似するのが、後者の「潘岳方称老、嵇康本厭喧」である。つまり、関鍵となる「潘岳方（ま）に老ゆと称す」の語は、進士科に落第し続ける作者の「身は是非の間に老ゆ」という悲嘆の、別種の表白ではなからうか。とすれば、「潘岳方称老」の句には深い悲嘆にもとづく誇張がありすぎ、盧綸の生年説をさぐる論拠にはなりえない。天宝七載生年説に従う劉初棠『盧綸詩集校注』巻一も、「潘岳方称老」の句は「嘆老嗟卑而已、不必泥看」という（一二二頁）。この解釈も充分成立するであらう。

結局のところ、現時点では、盧綸の「懷旧詩五十韻」に拠る天宝七載生年説が、他の傍証も得られて、最も信憑性が高い。作者自身の追憶の場合、二―三年の記憶違いは時として見られよう。しかし、天宝七載生年説と他の三説との間には、約十歳の差異があり、作者が自己の強烈な幼少期の体験を十年も誤るとは考えがたい。とはいえ、「至徳中」と題された二首の詩の存在、および「潘岳方称老」句の解釈など、天宝七載生年説をゆるがす論拠を、まだ完全に否定しきれないのが現状である。この意味で、周勛初主編『唐詩大辞典』²⁹「盧綸」（蔣寅執筆）や、周祖譟主編『中国文学家大辞典（唐五代卷）』³⁰「盧綸」（賈晋華執筆）、孫映達『唐才子伝校注』³¹、「中国大百科全书 中国文学」³¹（傅璇琮執筆）などが、「生年不詳」とするものも、充分理解できよう。特に唐代詩人の伝記研究にすぐれた業績をあげた傅璇琮自身が、七三七年以前↓？（生年未詳）↓七四八年へと、自説を次々と変更した事実は、盧綸の生年を確定することの困難さを如実に示している。

ところで、最近（一九九〇年五月）、西安市の南郊、長安県韋曲北塬から、盧綸の弟、盧綬の墓誌「大唐故盧府君墓誌銘」（盧綸の次子、盧簡辞の執筆）が出土した。この結果、盧綸には盧綬という実弟のいることが初めて判明するとともに、盧綸の生年説の是非を判定する有力な手がかりを得ることになった。この墓誌は、ただちに傅璇琮の論文「盧綸家世事迹迹刻新証」³²のなかにとりあげられた。盧綬の墓誌には、

唐元和五年（八一〇）三月廿四日、河中府宝鼎県尉范陽盧府君（綬）、終于邠州（今の陝西省）新平県長楽里第、享年六十。

とあり、さらに「臨黃府君（綸の父の之翰）二子、長、戸部郎中府君諱綸、續韓城府君（盧羽客）³³詩業、尤有頭名。次、宝鼎府君諱綬」という。傅璇琮は、この墓誌によって次のごとくいう（要約）。

弟の盧綸は元和五年（八一〇）、六十歳で没したので、逆算して天宝十載（七五二）生まれとなる。盧綸はその兄であるので、三歳離れた天宝七載（七四八）生年説と適合する。開元二十五年か、その少し前（『唐代詩人叢考』の旧説②）に生まれたというならば、（十四歳以上も年上となり）、年齢が離れすぎる嫌いがある。

盧綸の墓誌によれば、少くとも男の兄弟は二人であり、しかも同母兄弟らしい。開元年間生年説である③や④の場合でも、それぞれ十三歳、十二歳も離れることになり、同じく穏当ではなからう。ただ種々の事情のために、兄弟二人が十歳以上離れることは、ありえないことではない。しかし、天宝七載生年説は、盧綸自身の「懷旧詩五十韻」に拠った説であり、それを傍証する論拠もつけ加えられている。さらにこの弟の墓誌の出土によって、天宝七載生年説が全く無理のない、きわめて穏当な説であることが判明し、確実さを増したことだけは疑いない。現在のところ、盧綸は天宝七載に生まれたと考えておくべきであろう。

〔没年考〕

盧綸は、晩年の貞元年間、おおむね河中絳州節度使・河中尹渾城こんかの幕僚として蒲州（山西省永濟県）にいた。³⁴以下に列挙する三つの資料が、盧綸の最晩年に関する基礎文献である。

① 『旧唐書』卷一六三、盧簡辞伝に付す盧綸伝に、

大府卿韋渠牟得幸于德宗。綸即渠牟之甥也。数称綸之才、德宗召之内殿、令和御製詩、超拜戸部郎中。方欲委之掌誥、居無何、卒。

とある。

② 『冊府元龜』卷六二三、卿監部、論薦の条に、

韋渠牟為太府卿、其甥盧綸為檢校金部郎中。渠牟數稱綸之才、德宗召之内殿、令和御製詩、超拜戸部郎中。
とある。

③『新唐書』卷二〇三、文芸伝下、盧綸の条に、

渾城鎮河中、辟元帥判官、累遷檢校戸部郎中。嘗朝京師。是時、舅韋渠牟得幸德宗、表其才、召見禁中、帝有所作、輒使賡和。異日問渠牟、「盧綸・李益何在」。答曰、「綸從渾城在河中」。駭召之、会卒。

とある。

この三種間の異同は、①は盧綸が都長安で戸部郎中を拝命し（これは②も同じ）、その後ほどなく没したとするが、③は天子が都長安に召そうとしたところ、たまたま（河内府〔蒲州〕⁵³で檢校戸部郎中在任のまま）没した、とする点にある。

ところで、盧綸が舅の韋渠牟の推挙で都長安に召されようとしたことは、次にかかげる韋渠牟の「覽外生盧綸詩、因以示此」詩（『全唐詩』卷三二四）によって裏づけられる。

衛玠清談性最強 明時独拜正貞郎

関心珠玉曾無価 滿手瓊瑤更有光

謀略久參花府盛 才名常帶粉闈香

終期内殿聯詩句 共汝朝天会柏梁

傅璇琮は『唐才子伝校箋』卷四、盧綸の条で、本詩によれば、当時、盧綸は（正貞郎たる）尚書郎中（きつと戸部郎中であろう―原注）の職に任ぜられたが、まだ（河中府の）軍幕におり、（盧綸が）入朝して君主と唱和できることを（韋渠牟が）待ちのぞんでいることがわかる。これは『新唐書』の本伝に合う、とする。また、劉初棠『盧綸詩集校注』卷二

も、韋詩の第二・七・八句によって、戸部郎中に任命する辞令はすでに下つたが、まだ都に来ていない、と指摘する。このとき推挙してくれた韋渠牟に対する深い感激を表白したのが、盧綸の「敬酬太府二十四舅覽詩卷、因以見示」詩（『校注』卷二）である。「太府二十四舅」とは、当時、太府寺の長官（卿）であつた舅の韋渠牟を指す（岑仲勉『唐人行第録』）。その詩の前半には、

郗公憐憫亦憐愚 忽賜金盤徑寸珠

徹底碧潭滋涸溜 压枝紅艷照枯株

と歌う（郗公は晋の郗鑒、慈愛深いことで有名。ここでは韋渠牟を指す）。

「涸れし溜れを滋し」「枯れし株を照らせり」とは、いうまでもなく窮境にあるわが身にさし伸べられた韋渠牟の恩情をたとえた表現である。韋渠牟が太府卿に在任中、盧綸を推挙したことは、前掲の論拠①と②（『旧唐書』と『冊府元龜』）のなかにも記されている。このあと、盧綸は幕職をやめて河中府から都長安に赴くことになる。盧綸の「将赴京、留献令公」詩（『校注』卷二）は、すでに『盧綸詩集校注』に指摘されるごとく、徳宗の召請に応じて都に赴く際の作であろう。

沙鶴驚鳴野雨収 大河風物颯然秋

力微恩重諒難報 不是行人不解愁

詩題の「令公」とは、貞元十二年（七九六）二月、中書令を兼任した河中府の府主、渾瑊に対する敬称である（『旧唐書』卷二三四、渾瑊伝）。また転句の「恩重し」とは、元載・王縉の事件に連坐して以来、長く続いた不遇状態から抜躍して、その幕僚にしてくれた深い恩義をいう（盧綸「懷旧詩五十韻」参照）。本詩の存在によって、太府卿韋渠牟の推挙が実を結び、盧綸が幕職を辞し、都長安に向おうとしたことが確認できる。

韋渠牟は、『旧唐書』卷一三五や、『新唐書』卷一六七の本伝によれば、貞元十二年（七九六）の四月十九日、儒・道・釈の三教の講論の席上、よどみない弁舌ぶりを披露して以来、徳宗の寵愛を得るようになった人物である。その彼が太府卿に就任したのは、何年であろうか。権徳輿の「唐故太常卿贈刑部尚書韋公（渠牟）墓誌銘并序」（『全唐文』卷五〇六）には、「（貞元十二年）歲中歷右補闕・左諫議大夫」「間一歲、遷太府卿、錫以命服、又間一歲、遷太常卿」という。³⁹ 傅璇琮「盧綸考」（『唐才子伝校箋』卷四も同じ）は、この墓誌によつて貞元十三年（七九七）太府卿となり、同十四年、太常卿となり、同十七年（八〇二）七月に没したと推論し、王達津「盧綸生平系詩」も、韋渠牟の太府卿就任を貞元十三年とする。しかし、これは誤解である。「間一歲」とは翌年ではなく、一年を間てた翌々年を意味する。この点は、類語の「隔年」や「隔日」の語が、それぞれ毎年、毎日ではなく、一年おきに、一日おきにを意味するのと同様である。つまり、韋渠牟は貞元十二年、右補闕・左諫議大夫となり、「一歲を間てた」貞元十四年、太府卿となり、さらに「一歲を間てた」貞元十六年、太常卿となり、翌年の七月に没したのである。このことは、『旧唐書』卷十三、徳宗紀下、貞元十六年十一月の条に、「戊申（十四日）、以太府卿韋渠牟為太常寺卿」とあることによつても、間接的に裏づけられる。韋渠牟の太府卿就任は、下孝萱・喬長阜「盧綸」に指摘されるごとく、貞元十四年と考えてよい。⁴⁰ 従つて前掲の「將赴京、留獻令公」詩は、早くとも貞元十四年秋の作となる。劉初棠「盧綸簡譜」貞元十三年の条に、この二年内の作とするのも、傅璇琮らと同じ誤りを犯した結果であり、貞元十四、五年の二年内に改めるべきである。盧綸は、少くとも貞元十四年秋にはまだ生存していた。『新唐書』本伝の「駅召之、会卒」によれば、貞元十四年の秋に急死したとも考えられよう。しかし、この『新唐書』の記述は、おそらく誤りであろう。というのは、盧綸の①「元日早朝、呈故省諸公」（『校注』卷五）と②「元日朝迴、中夜書情、寄南宮二故人」（『校注』卷五）の二詩は、翌貞元十五年の元日の作と考えられるからである。劉初棠『盧綸詩集校注』は、①の詩に対して、

此詩僅見『全唐詩』、他本不録、則或為誤入、存以備考。按、詩題為綸作、則時已離渾瑊幕而入朝為官。綸於貞元十三年（七九七）至貞元十四年（七九八）秋間入京、詩當作貞元十五年（七九九）元日。

と述べ、㊸の詩も同じく貞元十五年の作とする。しかし、同「盧綸簡譜」貞元十四年の条に、「二年内」の作としてこの二詩①㊸を系年するように、韋渠牟の太府卿就任が貞元十三年ならば、二詩は貞元十四年元日の作とも充分考うる。しかし、すでに述べたごとく、これは、劉初棠が韋渠牟の太府卿在任期間を誤認した結果（貞元十四、五年を貞元十三、四年に誤認）であり、盧綸の入朝は、早くとも貞元十四年の秋であると推定される。盧綸の死の下限は、ほぼ元和十五年十二月以前（後述）と考えられるので、この二詩はともに貞元十五年元日の作となる。

劉説には、もう一つ、誤解がある。①の詩は（㊸の詩も含めて）『全唐詩』以外に見えず、盧綸の作かどうか疑わしいとするが、これも誤りである。『文苑英華』卷一九〇にこの二詩を収め、『全唐詩』はこれに拠って採録したのである。この点は、清の錢謙益・季振宜通輯『全唐詩稿本』第二十八冊（聯經出版事業公司影印）に、二詩の出処を『英華』と注することによっても確認される。現在のところ、盧綸の作と考えて少しも問題はない。

ちなみに、王達津「盧綸生平系詩」は、この二詩を監察御史となつてまもない大曆十年（七七五）の作と考え、次のごとくいう、

有「元日早朝、呈故省諸公」詩、結句云、「小臣無事諫、空愧伴鳴環」。又有「元日朝迴、中夜書情、寄南宮二故人」詩、説「無能裨聖代、何事別滄洲」。这是剛上任的詩、但均有不滿情緒、德宗是不顧聽諫諍、于是盧綸已懷辭意。

と。しかし、大曆十年⁴³当時、最も信憑性の高い天宝七載生年説によれば、盧綸はまだ二十八歳である。「閑夜貧還醉、浮名老漸羞」（㊸の詩）という感懐は、二十代後半の青年の心情とはそぐわず、かえつて五十二歳（貞元十五年）の時に

こそふさわしい。いいかえれば、「小臣 事の諫むる無し」「能の 聖代を裨たすくる無し」の二句は、監察御史在任ゆえの発言ではなく、儒生（読書人）としての責務感から生まれた措辞の一種、と理解しておくべきであろう。従ってこの二詩は、盧綸が少くとも貞元十五年の初春までは生存していたことを示す貴重な論拠となる。劉初棠『盧綸詩集校注』の「前言」には、盧綸の最晩年の事跡を次のごとく説明する。

貞元十三年（七九九）秋、因其舅太府卿韋渠牟之薦、由河中（府）入朝、超拜戸部郎中。貞元十四年（七九八）春、尚作「元日早朝、呈故省諸公」等詩。此後、如『旧唐書』盧簡辞伝所云、「朝廷」方欲委之（盧綸を指す）掌誥、居無何、卒。」

と。文中の貞元十三年、同十四年を、それぞれ一年ずつ遅らせて理解すべきである。ここで、盧綸が就いた最終官の問題点にも触れておきたい。『新唐書』盧綸伝や『新唐書』卷七三上、宰相世系表、盧氏第四房によれば、盧綸の最終官は「檢校戸部郎中」となるが、これは誤りらしい。姚合編『極玄集』卷上に「終戸部郎中」とあり、『旧唐書』盧簡辞伝や『冊府元龜』卷六二三（いずれも前掲）も、この立場である。最近出土した弟の盧綬の墓誌（前引）にも「戸部郎中府君諱綸」とあり、盧綸の詩集が一に『盧戸部詩集』と呼ばれるのも、盧綸がすでに渾瑊の幕府在任時に就いた檢校官（令外の官である寄祿官）の職をやめ、戸部郎中を正式に拜命した後⁴⁵に没したことを示すものであろう。

盧綸の死の下限は、ほぼ貞元十五年十二月と考えられる。その論拠は、以下の三点である。

① 『新唐書』盧綸伝の「德宗 異日問（韋）渠牟、『盧綸・李益何在』。答曰、『綸從渾瑊在河中』」によれば、盧綸は貞元十五年十二月二日に没した渾瑊や、貞元十七年七月二十五日に没した韋渠牟よりも先に没した、と推定でき⁴⁶る。ただこの後に続く「馱召之、会卒」の語が誤りであると判断されるので、この逸話自体の信憑性にも若干、疑問が残る。

しかし、⑥ 『旧唐書』 盧簡辞伝にも、「徳宗召之内殿、令和御製詩、超拜戸部郎中。方欲委之掌誥、居無何、卒」とあり、盧綸は貞元十五年の元日以後、ほとんど没したと推定され、⑥の記述とも矛盾しない。

⑦ 盧綸の現存詩（五百篇のうち、三百余篇が現存）中に、深い恩義と知遇を受けた渾瑊の死を悼む詩が見いだされず、盧綸は⑦に指摘されるごとく、渾瑊よりも早く没したらしい（『盧綸簡譜』参照）。

かくて、現在のところ、盧綸は貞元十五年元日以降、同年十二月以前に没した、と考えられる。

〔備考〕

傅璇琮「盧綸考」（『唐才子伝校箋』巻四も同じ）や王達津「盧綸生平系詩」は、盧綸の「奉和聖製『麟德殿宴百僚』」詩（『校注』巻二）を貞元十四年（七七八）春の作とする。これは、『旧唐書』巻十三、徳宗紀下、貞元十四年二月の条に、

戊午〔七日〕、上御麟德殿、宴文武百寮、初奏「破陣楽」、偏奏「九部楽」。……上又賦「中春麟德殿宴群臣」詩八韻、群臣頌賜有差。

とあり、本詩をこのとき徳宗が作った「麟德殿宴百僚」詩（『全唐詩』巻四）に奉和した作品と考えたのである。しかし、これは文献調査の不備から生まれた誤りである。劉初棠『盧綸詩集校注』巻一は、その誤りを次のごとく指摘する（大意）。

『全唐詩』巻四には、徳宗の麟德殿における詩二首を収める。一首は「中春麟德殿宴群臣」詩（ただし、『全唐詩』巻四では「中春麟德殿会百僚觀新楽詩一章章十六句」と題する。ここは前掲の『旧唐書』徳宗紀下に従ったもの）で、詩は八韻、「芳歲肇佳節、物華当仲春」の句がある。これは、『旧唐書』徳宗紀下、貞元十四年二月の条（前掲）にいう詩題・句数・時期と符合する。もう一首の「麟德殿宴百僚」詩は六韻で、中に「務閑春向暮」の句があり、『旧唐書』徳

宗紀下、貞元四年三月（甲寅〔六日〕）の条に、「宴群臣於麟德殿、設「九部楽」、内出舞馬。上賦詩一章、群臣屬和」と記される作詩の時期と符合する。さらに盧綸の奉和の詩題とも一致し、六韻の詩である点も共通する（和韻詩の一種でもある「引用者注」）。これによれば、盧綸の本詩は貞元四年（七八八）の作である。

この劉説の論証は、充分説得力をもつ。従って本詩による推論——盧綸が韋渠牟の推薦によって徳宗に召見され、そのうえ「帝、作る所有りて、輒ち廢和せしめ」（『新唐書』盧綸伝）た時期も貞元十四年春であるとする傅璇琮「盧綸考」の説や、貞元十四年、盧綸はすでに都長安におり、『新唐書』本伝の「駅召之、会卒」は誤りであるとする王達津「盧綸生平系詩」の説は、いずれも成立しえない。

〔参 考〕

盧綸は大暦十才子中の「翹楚」（元の呉師道『呉札部詩話』）・「冠冕」（王士禛『分甘詩話』卷四）などと評される重要な詩人である。盧綸の基礎的研究は、傅璇琮や王達津らに始まったが、現時点では、劉初棠『盧綸詩集校注』が「盧綸簡譜」などの資料をも収めていて最も有益である。

現在のところ、盧綸は七四八生？—七九九没と考えるべきである。聞一多「唐詩大系」や呉文治『中国文学史大事年表』（上）は「七四八生—八〇〇没？」とし、岑仲勉『唐人行第録』「韋二十四渠牟」の条には貞元十五、六年（七九九—八〇〇）ごろ没とする。なお、没年説のみをあげれば、七九八—九九年没が傅璇琮・劉初棠（『盧綸簡譜』）・賈晋華（周祖譔主編『中国文学大辞典（唐五代卷）』）らであり、七九八年没が王達津、七九九年没が下孝萱・喬長阜「盧綸考」、七九九年没？が蔣寅（周勛初主編『唐詩大辞典』）・孫映達『唐才子伝校注』である。

注

- 第二冊、中華書局、一九八九年。
 ただし、「前言」には「盧綸生於開元末」とし、矛盾が見られる。なお、本書は上海古籍出版社、一九八九年刊。
 中華書局、一九八〇年。
- (3) もと「盧綸・戎昱生平系詩」(『南開大学学報』(『哲学社会科学』一九七九年四期)として発表。
 上海古籍出版社、一九八六年。
- (4) 山東教育出版社、一九八九年。卞孝萱・喬長阜「盧綸的生平与創作」(『四川師範大学学報』一九八八年二期)は未見。
 傅璇琮「盧綸考」は、貞元四年以降の数年間の作と考証し、貞元末の作とする『旧唐書』盧簡辞伝の説はやや妥当ではない。
- (5) 『唐才子伝校箋』巻四、夏侯審の条(儲仲君執筆)は、貞元五・六年、暢当が果州刺史として転出する前の作とするが、同書
 巻四、暢当の条(同じ儲仲君執筆)には、暢当の果州刺史就任を貞元十一年以後としており、矛盾する。
- (6) 王達津の論文に、「旧唐書」巻三六、天文志下の「(至徳元載)十一月壬戌五更、有流星大如斗、流于東北」を指すとす。
 永泰元年上京説については、下・喬「盧綸」参照。
- (7) 『唐才子伝校箋』巻四、暢当の条(儲仲君執筆)参照(一一六頁)。聞一多「唐詩大系」も七四三年(天宝二年)生まれとする。
- (8) 『冊府元龜』巻八四一、総録部、文章五(李端の条)参照。
 儲仲君「大曆十才子的創作活動探索」(『文学遺產』一九八三年四期)参照。
- (9) 王達津の論文は、この三詩を至徳二載(七五七)に系年する。
 古逸叢書三編之二十三、中華書局、一九八七年影印。
- (10) 王達津の論文は二十歳のときの作とし、「但自称衰鬢、過于頽唐」と評する。
- (11) 劉初棠「盧綸簡譜」は、大曆元年、十九歳のときの作とするが、従いがたい。
 劉初棠「校注」巻五は、「顏衰……」の句によって、大曆の初め、盧綸が再び故郷に帰ったときの作とするが、当時、作者は二十代前半であり、従いがたい。
- (12) 万曼「韋応物伝」(『国文月刊』第六十期、一九四七年)や廖仲安「韋応物」(呂慧鵬ら編『中国歴代著名文学家評伝』第二巻所収)も、滁州刺史就任を建中四年の初夏とするが、孫望「韋応物事迹考述」(『蝸叟雜稿』所収)や羅聯添「韋応物年譜」(同『唐代詩文六家年譜』所収)、芳村弘道「韋応物の生涯(下)」(『学林』八号、一九八六年)などは、その就任を一年早い建中三年のこととしており、かなり信憑性が高い。ただ両説は一年の差異にすぎず、当面の論旨自体にはあまり影響はない。

- (19) 傅璇琮「韋応物系年考証」(同『唐代詩人叢考』所収)や、羅聯添「韋応物年譜」は、ともに大暦四年の作とする。
- (20) 劉初棠「盧綸簡譜」は、二詩を大暦十三年(七七八)に系年する。「唐才子伝校箋」も、後で「臥病:」詩を約大暦十四年の作とする。ちなみに、韋応物「贈馮著」詩を、傅璇琮「韋応物系年考証」はほぼ大暦十二年ごろの作とし、虞莎「說韋応物「長安遇馮著」詩」(『文史』四輯、一九六五年)も同じであるが、羅聯添「韋応物年譜」や孫望「韋応物事迹考述」は大暦九年の作とする。また韋応物の「長安遇馮著」詩の作成年代に関しては、羅聯添は大暦十年の作とするが、虞莎は大暦十三年の作と見なす。孫望は、韋応物の「寄馮著」詩を大暦十年の作とする。
- (21) 卞孝萱「喬長阜」「盧綸」も、ほぼ同じ解釈を下す。「天寶三載、南有海賊吳令光等抄掠台・明」(『資治通鑑』卷二二五)四載、北有契丹及奚酋長各殺公主、拳部落叛」(『旧唐書』玄宗紀下)。開元盛世没有給盧綸留下多少美好的回憶、而天寶以來「四方遂有兵」的局勢、却在他的心靈上籠罩了時代的陰影」と。
- (22) 『漢書』卷六四下、終軍伝参照。
- (23) 『漢語大詞典』8、童の条(三八八頁以下)も参照。
- (24) 李益には「贈内兄盧綸」詩(『全唐詩』卷二八三)がある。元の呉師道「呉礼部詩話」には、「盧綸与李益中表、唱酬交賛」という。
- (25) 拙稿「唐代詩人生卒年論攷考三題―張九齡・李益・張説―」(早稲田大学『中国文学研究』第十六期、一九九〇年)参照。
- (26) 拙稿「唐代作家新疑年録」(3)(『文経論叢』二十五卷三号、一九九〇年)参照。
- (27) 湖北辞書出版社、一九八九年。
- (28) 王達津の論文は、大暦四年の作とする。
- (29) 中華書局、一九九二年。
- (30) 中国社会科学出版社、一九九一年。
- (31) 中国大百科全書出版社、一九八六年。
- (32) 董健主編「文学研究」第一輯、南京大学出版社、一九九二年。
- (33) 盧綸の墓誌によれば、盧羽客―茂礼―釗―祥玉―之翰―綸―綬となる。
- (34) 母の没したときも、蒲州は盧綸の故郷だったので、当地で喪に服した。
- (35) ただ明の劉成徳編「唐盧綸詩集」の序文には、「即遣駅騎召之、召至、卒矣。帝深悼之」という(和刻本)。
- (36) 王達津の論文も、貞元十四年に系年する。
- (37) 『旧唐書』徳宗紀下、貞元十二年の条、および標点本の「校勘記」も参照。

- (38) 『資治通鑑』卷二三五、貞元十二年の条に、「十一月乙未（八日）、以右補闕韋渠牟為左諫議大夫」とある。
- (39) 四部叢刊『權載之文集』卷二三にも所収。
- (40) 譚優学「李益行年考」（同『唐詩人行年考』所収）は、『旧唐書』韋渠牟伝のみから、その太府卿就任を貞元十四年前後とする。
- (41) 譚優学「李益行年考」貞元十四年の条には、『新唐書』盧綸伝によつて、「（韋）渠牟称薦盧綸是在官太府卿時、……。盧綸留京、入禁中、為時当不甚久、即仍返河中。故德宗未久即不復記憶、問盧・李何在？ 牟答以『從渾瑊在河中』という。「將赴京、留獻令公」詩は、初回の一時的な上京時の作とも考えうる。しかし、詩の内容から、盧綸は幕僚の職をやめて京官となつて赴任する時の作と推測され、やはり早くとも貞元十四年秋の作と考えるべきであらう。
- (42) 劉初棠「校注」に、「滄洲」を「濱水之地、古指隱士幽居」と注するが、ここでは、おそらく黄河のほとりにある蒲州（河中府）を指すであらう。
- (43) 劉「盧綸簡譜」は、大曆九年前後、監察御史になつたとし、王達津も同年冬の就任とする。
- (44) 『旧唐書』卷一三四、渾瑊伝や、『資治通鑑』卷二三五。ちなみに『旧唐書』德宗紀下に「庚午（一日）没とするのは誤りであらう。
- (45) 『旧唐書』德宗紀下や、權德輿の墓誌参照。
- (46) ただし、下・喬「盧綸」は、『新唐書』盧綸伝によつていう、「渾瑊卒于貞元十五年十二月（『旧唐書』德宗紀下）。「馭召」盧綸時、渾瑊尚在。不久、二人俱卒、但不知誰先誰後、暫定盧綸卒于貞元十五年」と。しかし、傅璇琮「盧綸考」などに指摘されるごとく、盧綸は渾瑊より先に死んだと考えるほうが自然である。
- (47) 『冊府元龜』卷四〇、帝王部、文学の条に、「（貞元）十四年二月、帝製「中春麟德殿會百僚觀新樂詩」、仍令皇太子書以示百僚」とある。『玉海』卷一九、御製詩歌の条も参照。
- (48) 『全唐詩』卷四の題下注も参照。
- (49) 『冊府元龜』卷四〇、帝王部、文学の条に、「（貞元）四年三月甲寅、宴百僚於麟德殿、設九部樂、及内出舞馬。帝製序及詩、以賜群臣。於是給御筆、仍命屬和」とある。『玉海』卷一九、御製詩歌の条も参照。
- (50) 劉初棠は引き続いて、次のごとくいう、「趙明誠『金石録』卷八、『唐麟德殿宴群臣詩、德宗撰。皇太子誦行書。顔防書渾瑊表附。貞元四年六月』。知德宗之詩、当年即賜給渾瑊。盧綸奉和之詩、恐作於河中」と。
- (51) 『盧綸詩集校注』附録四所引。

(補注)

王鉄『詩詞曲語辭例積』(増訂本、中華書局、一九八六年)「方」(一)「已・已經を意味する副詞」の条には、盧綸詩の本句「潘岳方称老」をとりあげ、この方は「方に」ではなく、「方に」であるとす(八一頁)。この解釈も、当該句が潘岳の典故をきわめてゆるやかに用いた、深い嘆きの表現にすぎないことを示唆するようである。